

巻頭言

21世紀は「共生」の時代

テーマは「心の教育」

山形県教育委員会 教育長 木村 宰



すてきな絵本が出版された。題して『ひとりじゃないよ』。谷川俊太郎氏をはじめ無名の方まで、約二十人からの寄稿によるもので、『21世紀に生まれてくる子どもたちへ』という副題のついた、珠玉の名言集である。その中の一つ、音楽家タケカワユキヒデ氏の文

20世紀が物質的に豊かになるための
百年だったとしたら、

21世紀は 世界中の人たちが やさしくなるための
百年になるといいなと思っています。

このように短文ばかり。絵を紹介できないのが残念である。

確かに、20世紀を振り返ったとき、特にその後半部は、「物」とか「富」とか「便利」とか、目に見えやすいもの、個別に計測できるものに、随分と重きが置かれてきたように思われる。こういう時代には、「経過」などはどうでもよく、「結果」が形を整えて出てくれば、それでよいという風潮もあり、日常生活でも余計な「手間暇」を省くことを、大切な生活技術とする傾向があった。

しかし、このことが問題なのだと思う。昨今の教育問題の根本がここに由来していると思われるものが少なくないからである。

最も日常的なものとして、食事を例にして考えよう。「ご飯を炊くこと一つをとり上げて、昔は薪をくべながら「はじめちよろちよろ、中はっぱ」などと、「手間暇」をかけてご飯を炊いていた。それが、現代の生活では、スイッチを押してさえおけば、予定された時刻には、ご飯が炊きあがる。極端に言えば、コンビニでできあがりの「結果」だけを、容易に手に入れることもできるのである。

しかし、こういう便利優先の在り方には、何か欠落しているものがあるように思われる。つまりは「経過」や「手間暇」の欠落から生まれる「何か」である。そしてこのことが、大きく「心の教育」

の問題につながっているものとも考えるのである。

「ご飯を炊きながらの、眠い、寒い、辛い仕事に耐える努力の「経過」の中での自己凝視がまずあって、自分の役割や他人とのかわりなどについて、自然と自覚していったのである。更には、食事そのものが、自然の恵みへの「感謝」の気持ちとか、生命への「畏敬」の念など、人間としての最も大切な「生き方・在り方」について考える機会にもなったはずである。そう考えれば、現代は「豊かさ」と「便利さ」との引き換えに、人間にとって最も大切なものを、失いつつあるという危機に直面しているということになる。

21世紀。人々が「やさしくなるための百年」は、まさに人間としての「心」をとりもどすためのもの。今、教育で求める「生きる力」とは、こういうことを自覚する力のことでもある。

更にこれからは、まさに「共生」の時代。そのときに求められるものは、「生きがい」とか「健康」とか「安全」とか「住みやすさ」とか、それらはややファジーで、計測しにくいのが、全体バランスの中で総合的に考えていくべきものばかりである。21世紀は、そういうことに、価値を求めていく時代と考える。

山形県の自然や文化や人情の中には、「共生」の時代にふさわしい、人間としての「心」をとりもどすことのできる要素が、まだまだ残っているように思われる。教育の世界でも、こういう大テーマに向かつて、新しい世紀を歩き出したいものである。

最後に、同じ絵本からもう一つ。ある主婦の方からの寄稿文。

私が少女だった頃、戦争で悲しい日が続きました。その時の先生の言葉を、今でも覚えています。

「今日という日の中で、何かひとつうれしいことをみつけなさい。なにもないときは、生きていることをよるこびなさい。」